

(研究部門)

お互いを認め合える本田っ子
—「学習の個性化」を支える授業デザイン—

大阪市立本田小学校 池上智希

1. 研究主題設定の理由

令和4年度から本校の研究主題を「お互いを認め合える本田っ子の育成」と設定している。その理由として、「子どもが、相手意識や目的意識をもって学ぶことができていない」「日々の生活を見ても相手の思いを受け止めることができていない」(令和4年度 第1回研究推進委員会より)といった本田小の課題が挙げられる。そこで令和4年から2年間は「対話」を中心に教師の授業力向上に焦点をあてて研究を進めた。その結果、経年調査の「自分とちがう考えの人と話しているとき、その人がどうしてそのように考えているかを分かろうとしていますか。」という質問項目において、肯定的に回答する児童の割合は、どの学年も市平均を上回る結果となった。また4年生～6年生においては、同一母集団と比較しても、昨年度の結果から向上していることが分かった。これらの結果から、令和4年からの研究では、一定の成果が得られたことが伺える。一方「教員それぞれが思う『お互いを認め合う』姿を目指した取り組みになっている」「『お互いを認め合う姿』を評価することが難しい」といった課題が残った。昨年度の研究部での話し合いの結果「お互いを認め合う姿」を体系化し、研究を進めることは難しいと判断した。そのため今年度からは目指す子ども像として「お互いを認め合える本田っ子」を残しつつ、副題である「『学習の個性化』を支える授業デザイン」に焦点をあてて研究を進めることとする。

2. 研究の趣旨

目指す子ども像の背景には、「自分の考えをもつこと」「自分の考えを伝えること」「他者の考えや思いを受け止めること」といった点を苦手とする児童がいることが挙げられる。この課題解決のためには、児童自らが学習の状況を把握し、主体的に学習を調整することができるよう促していくことが求められると考える。これは、令和3年1月に中央教育審議会から出された答申「令和の日本型教育の構築を目指して」にも記載されていることである。児童にとっての「個別最適な学び」を目指し、「『学習の個性化』を支える授業デザイン」に焦点をあてて研究を進めていく。以下具体的に研究の目的を記す。

- 「見通し」と「振り返り」を充実させ、児童自らが学びを調整することができるようにする。
- 知識・技能等の資質・能力を土台とし、児童それぞれが選択・判断できるような場を授業及び単元内に設定する。
- 個に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会を提供するため、児童の学びを見取り(学習評価)を充実させる。
- 先進的研究校や有識者から学ぶ場を企画し、それらを全市へ発信することで本校の学びを広げる。

3. 研究の概要

研究主題にせまるため、研究の視点を以下のように設定した。

視点① 見通し→振り返りのサイクル

子ども自身が自らの学びについて、「何を」「どのように」学ぶのかを見通し、学習後はその「目標」「方法」「内容」が良かったのかを振り返るようにする。そして、その振り返

りが次の見通しとなるといったように「見通し」と「振り返り」がセットとなるようにする。見通しを持つタイミングや振り返りのタイミングについては、毎時間とは限らない。指導案にはタイミングも含め、その工夫を記入する。

視点② 自己選択・判断する場の設定

子どもに学びを委ねる場をデザインする。その際、単元全体を見通すことが重要である。単元のどの部分を委ね、そのためにどのような知識・技能などを指導するか。また共通の問いや個別の問いをどのようにもたせるかなど考えながら単元を構成する。また伴走者として子どもの学びをどのようにサポートするかも合わせて考える。指導案にはそれらを記入する。

視点③ 学びの評価

探究的に学んでいる子どもの活動はそれぞれである。可能な限り一人一人学びを見取り、その評価を考えるようにする。指導案には、予想される探究する児童の姿とその学びを評価するための基準を書く。

4. 研究の成果と今後の課題

(1) 研究の成果

「学習の個性化」の授業イメージを「個の願いや思いを大切にする授業」として学校全体で共通理解を図り、設定した研究の視点（1見通し→振り返りのサイクルの充実 2児童の自己選択の場の設定 3学びのプロセスの見取り及び評価）をもとに研究授業及び協議会を行った。協議会で語り合う内容は「教師の手立て」が中心であった昨年度までとは違い、「子どもの学びの事実やその思い」へと変容していたと感じる。個の学びの見取りが重要であることを共通理解できたことは成果であると考え。また普段の授業実践でも研究の視点を意識し、「個の願いや思いを大切にする」授業・単元デザインを描く教員が増えてきたことも大きな成果でだろう。さらに子どもたち自ら課題や学び方等を選択できる環境で学ぶことを通して、自信で学びを調整する姿が多く見られるようになってきた。実践を重ねることで、教師だけでなく子どもたちとも「個の願いや思いを大切にする授業」を具体化できつつあると考える。

(2) 今後の課題

一方で、課題として大きく二つが挙げられる。一つは「学習の個性化」における具体的な子ども像を描くことである。「個性化」された子どもの姿を一括りにしてしまうことはできないが、理想とする学ぶ姿を定義することはできると考える。そうすることでより子どもの学びを見取りやすくなるのではないかと考える。二つ目は動機付けについてである。子どもたちが自身の課題や学び方を選択していく単元デザインでは、途中でその目的を見失い学び意欲が低下していく姿も見られた。子どもたちにある程度学びを委ねていく以上、学び続けたいと思えるような動機づけを大切にしていくことが必要であると感じた。これらの課題を踏まえ、次年度も継続して研究を深めていきたい。